

日本アフェリシス学会第1回中部地方会抄録

1997年11月8日(土) 於:ホテルプラセオ名古屋 代表世話人:前田憲志(名古屋大学)

当院における血液浄化療法の現況

鍋島邦浩*・河合華代*・高山公洋*・丸山仁実**
 林 哲也**・尾嶋良恵**・木下昌樹**・新田功児**
 西分和也**・和田英喜**
 市立岡崎病院腎臓内科*, 同臨床工学室**

当院は3次救急救命センターを持つ総合病院であり、ICUで血液浄化療法を行う機会が多い。腎臓内科と透析室の新設がされた平成6年2月から平成9年9月までの約3年半を振り返って、血液浄化療法の現況を検討した。

慢性腎不全の新規維持透析導入は167例で、14例(8.4%)がCAPDであった。急性腎不全症例は多臓器不全の1分症として認められる症例が増加傾向で、血液浄化はCH(D)Fが中心療法となっており77例に実施された。DFPPを含む血漿交換は16例で消化器系疾患に多く、血漿吸着は14例で神経疾患に対する免疫吸着が多かった。DHPは37例に行われ、32例がエンドトキシン吸着であった。

以上の血液浄化治療の詳細を症例呈示を交えて報告する。

血漿交換療法が奏功した水疱性類天疱瘡の一例

粥川誠至*・幾高敏晴*・石原 毅*・安江由里香*
 大熊俊男*・石黒源之*・平野高弘*
 浦田裕次**・原 明***
 平野総合病院人工透析センター*・同皮膚科**
 岐阜大学第1病理学***

症例は、75歳女性。脳出血後遺症のリハビリ目的で入院中、平成7年2月3日より全身の掻痒感を訴えていた。その後、左右足底に緊満性の水疱が出現、徐々に四肢、体幹に拡がり、皮膚科にて類天疱瘡と診断された。

ALPの上昇、低蛋白血症、CRP陽性、IgAの軽度上昇、IgEが7,300 mg/dlと著明な上昇、CH 50の軽度の上昇を認め、天疱瘡、類天疱瘡の70%に認められるという抗皮膚抗体は陰性であった。病理所見では、表皮内に水疱を認め、表皮下細血管の増生を伴い、好酸球の湿潤は高度ではなかったが、類天疱瘡の所見と一致した。

平成7年2月15日よりプレドニン40 mg内服を開始したが、改善の傾向を認めないため、2月25日より

プレドニン50 mgに増量した。しかし水疱、びらん部より、滲出多く、悪臭を伴い二次感染も疑われ、高齢であることも考えると長期間のステロイド大量投与は負担が多いと考え、血漿交換の導入を計画した。血漿交換前の皮膚症状は、腋窩を中心とした体幹に水疱が見られたが血漿交換後は色素沈着を認めるのみで著明に改善した。足の水疱も血漿交換後は消失、改善し、さらに、ステロイドの減量が可能で、IgE、好酸球なども臨床経過の改善と共に低下した。

ステロイド抵抗性類天疱瘡には、二重濾過血漿交換療法(DFPP)、全血漿交換療法(PEX)が有効であり、適応があれば積極的に考慮すべき治療法と考えられた。

体外循環方式におけるAC1760のろ過性能の評価

高木豊己

新生会第一病院

二重濾過法の体外循環方法にはストップ法、リサイクル法、ディスカード法がある。そこで、我々は血漿成分分離器AC1760の臨床における血漿成分の濾過性能を3つの濾過方式で比較検討した。

血漿分離器はOP-05を用い、血漿成分分離器AC1760はセルロースジアセテート膜で膜面積は1.7 m²である。対象は慢性関節リウマチ症例男性2名、女性4名の計6名であった。そして、1症例に対し3種類の濾過方式を実施した。

血漿総タンパク、アルブミン、フィブリノーゲン、IgG、IgM、 α_2 -マクログロブリン、総コレステロール、トリグリセライドのふるい係数(SC)および除去率を測定した。3種類の濾過方式における血漿処理1 L時点のSCでは各濾過方式の間に有意差は認めなかった。血漿処理2 L時点ではIgMにおいてリサイクル法、ストップ法に対しディスカード法は有意に低値であった。血漿成分の除去率においてアルブミンはディスカード法<リサイクル法<ストップ法の順に損失が少なかった。他の血漿成分の除去率には濾過方式による有意の差は認めなかった。3種類の濾過方式の検討で濾過性能に大きな差は認められなかったが、その中でディスカード法がやや優れていた。